ゆうことみゆきの
なるほど
アイヌ文化エッセイ

ソンコdeソンコ

Vol.119

アイヌ文化のことをもっともっと話したい!
本田優子と村木美幸の二人が、その魅力を交代で
執筆するソンコ(=お便り)形式のエッセイです。

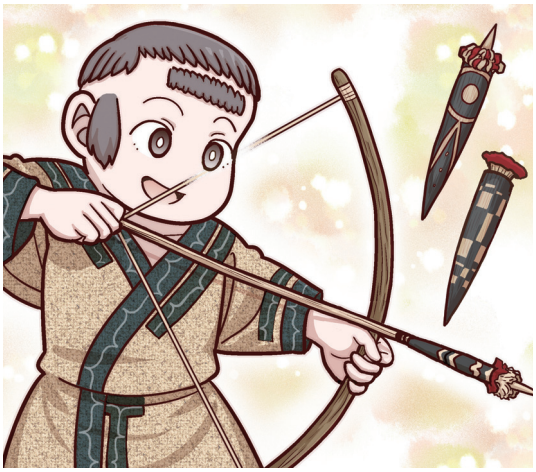
今月のテーマ

へペレアイ(花矢)

本田優子(札幌大学教授)

イヨマンテは、飼い育てたヒグマやシマフクロウなどの動物の霊をカムイモシリ(神の国)に送る重要な儀礼です。その時に子グマに放たれる矢がへペレアイ(へペレ=子グマ、アイ=矢)。エペレアイ、ペウレプアイとも言います。鏑と呼ばれる黒い部分には白い文様が浮かび上がり、矢の先も花のように削られたり赤い布がつけられたり、本当にきれい。シマフクロウやワシ、タヌキ、キツネなどの霊送り儀礼でも用いられたようです。

萱野茂先生は『イヨマンテの花矢』(二〇〇五年)の冒頭、最も古い記憶の一つとして、お父さんがペレアイを作っていた時の光景について述べています。水に濡らした幅の細い布を、白木の鏑部分に巻いて模様にし、白樺の皮を燃やした煤を付けて黒くした後、布をほどくとその部分が白く残る。このようにして作った矢をチロシアイというそうです。儀式で花矢を射るのは男の子たち。当時四歳の萱野先生は幼すぎて矢を射ることはできなかったけれど、真っ赤な布を付けた矢が子グマに当たって跳ね返り、雪の上に散らばっている美しさはずっと脳裏に焼き付いていると書かれています。



イラスト/荘田悠人

ただ、ペレアイは地方によって形や製法が結構違います。鏑の部分は、煤で燻すのではなく墨汁を塗って黒くしたり、前述のように細く切った布や樹皮を剥がすのではなくマキリ(小刀)で直接文様を彫ったり、様々。

とりわけ鏃の部分は、ある研究書によれば、道東や石狩湾地域では三〜五センチと長いものが多いのに対し、胆振や沙流川流域では長くても一・五センチ程度のものが多いとのこと。なぜなら、鏃が長く鋭いとクマの毛皮が傷ついて商品価値が下がるので、比較的和人との関係性が強かった地域では鏃が短くなっていったのだそうな。二風谷(沙流川流域)の萱野先生は「花矢は熊に刺さりもしないし、傷さえも付けません」と書いてるけど、たとえば浜益(石狩湾地域)でのイヨマンテの記録(一八六三年)には、蓑を着たように子グマに花矢が刺さっていると記されてます。これを誇張だとする考え方もあるけど、その研究書によれば浜益の鏃は四センチ以上。案外事実だったのかもしれません。

国立アイヌ民族博物館(白老)には、様々なペレアイが展示されています。鏃の長短や赤布の有無等、地域を意識しながらご覧になるのもいいですね。 J

次回のテーマは「シンタ(ゆりかご)」
村木美幸(アイヌ民族文化財団常勤理事)
が担当します。

ウポポイ
NATIONAL AINU MUSEUM and PARK
民族共生象徴空間
JR白老駅から徒歩約10分

ウポポイPRキャラクター
「トゥレッポん」

イランカラプテ
「こんにちは」からはじめよう。

■本田優子(ほんだゆうこ):金沢市生まれ。札幌大学教授。北大卒業後11年間平取町二風谷に住み、アイヌ語講師を務める。
■村木美幸(むらきみゆき):白老町生まれ。アイヌ民族文化財団常勤理事。先住民族アイヌの一員として文化継承活動に努める。
■荘田悠人(しょうだゆうと):平取町二風谷生まれ。漫画家兼イラストレーター。幼い頃のアイヌ文化が原風景。東京在住。